

13.子ども食堂の可能性：新しい居場所の定義

梅田藍子

1. 子ども食堂と貧困

時折ニュースやメディアなどでよく耳にする“子ども食堂”。そもそも子ども食堂とは何を目的にできたのであろうか。最初の子どもの食堂といわれている、東京都大田区東矢口にある「気まぐれ八百屋だんだん 子ども食堂」では、「こどもが1人でも安心して来られる無料または低額の食堂」を目指して作られた。近年の日本では結婚しても離婚する、いわばひとり親が急増している。ひとり親になればもちろん入ってくるお金が半分になるわけであるから、その分、子の親権を持った親は今まで以上に働く必要が出てくる。このことに影響を受けているのは、働く親はもちろん、残された子どもたちである。親が必死に働いている時に子どもは家に取り残されたままである。つまり、家で1人ご飯を食べる、孤食を強いられる子どもが急増しているのである。晩御飯がすでに作られており、それを温めて食べるならまだしも、お金を渡され、好きなものを買って食べる生活を続けていると1番体が成長するときに十分な栄養が足りない、偏ってしまう、そんな事態が起きてしまうのである。そんな子どもが少しで減るようにと作られたのが子ども食堂、最初の目的である。

愛知県の子どもの食堂の数は名古屋市以外の愛知県内に66施設、名古屋市に41施設と合計100施設以上ある。(2019年5月時点)子ども食堂が作られた本来の目的は「貧困家庭の子どもたちを救うため」であった。では、ここからは愛知県の貧困率はどうなっているのかを見ていこうと思う。まず、貧困とは大きく分けて2つある。1つ目の絶対的貧困とは、衣食住などの生きていくために必要最低限な物質、経済力が欠けている状態のことを示す。2つ目の相対的貧困はその社会で一般的になっている生活水準に達していない状況のことを示す。次に愛知県の子どもの貧困状況について見ていく。「愛知子ども調査」によると、国民生活基礎調査の貧困線【世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得の中央値の半分の額】(122万)による愛知県の子どもの貧困率(平成28年)は5,9%と、全国の子どもの貧困率(平成27年)の13,9%に比べてかなり低い水準にあるばかりでなく、愛知県独自の貧困線(137.5万)による、愛知県の子どもの貧困率(平成28年)も9,0%であり、愛知県は所得水準が高いだけでなく、所得格差も相対的に低いことから、子どもの貧困率自体は全国に比べると低くないのである。しかし、「愛知子ども調査」の個別の調査状況によると、過去1年間に食料や衣料が買えなかった経験があったの割合は約9~18%となっている。また過去1年間に未払い・滞納・債務不履行の経験があったの割合は約2~6%となっている。この状況は学年が上がるにつれて少しずつ増加しており、厳しい状況に子どもたちが置かれていることがわかる。愛知県の所得水準のみに目を向けてみると、他県よりも多少裕福であるように見えるが、1人1人の家庭状況を見れば、当然家庭ごとに置かれている状況は異なるわけであるから、簡単にひと言で他県よりは大丈夫などと片付けてよい問題ではないと思う。

2. 子ども食堂の存在

先ほども上で述べたように愛知県の貧困はそこまで深刻化はしていない。しかし、子ども食堂の数は近年増加傾向にある。私は子ども食堂が増加した理由は貧困とは別にあると考える。最初の子どもの食堂ができてから少しずつ知名度を上げていき、更にニュースや報道番

組などで特集が組まれることによって子ども食堂の存在を知らなかった人が興味を持ち、行ってみたい、または自分も子ども食堂を開設したいと思う人もいるはずである。私は、その思いやりの連鎖が徐々に大きくなり数多くの子ども食堂ができたと考えている。その連鎖から子ども食堂開設を決めた人でも最初の目的は貧困で困っている子どもたちを少しでもいいから救ってあげたい、助けてあげたい。と思い始める人が多いと思う。しかし、現実問題で実際に貧困で苦しんでいる子どもたちが子ども食堂に自ら足を運ぶことは難しいのである。小さいながらも「助けてください」といえる子どもはほとんどいない。また、自分が貧困で困っているなどと自覚している子どもも少ないと思う。本当の対象者としている子どもが来ない、というのは子ども食堂の大きな課題となっている。このように始めた目的は貧困者対象であってもあまり本当の対象者に届いていないのが現状である。では、今の子ども食堂はどのような立ち位置で行っているのかというと、地域コミュニティが中心になっている。子ども食堂は年齢・性別などを問わずだれでも参加することができる場所になっているため、小学生の子どもたちや、中学生、または子どもを連れてくる親子連れなどと様々な年代の人が一気に集まることができる場所なのである。どんな世代交流があるのかを私がお邪魔させてもらった、北区「わいわい子ども食堂」での経験とゼミで聞いて学んだことなどをもとに述べていこうと思う。「わいわい子ども食堂」は北医療生活協同組合のすまいるハートビル2階で毎月第1水曜日の午後5時~7時に開催されている子ども食堂である。私は昨年11月、12月とお邪魔させてもらった。参加した2回とも途中からの参加であったため、ごはん前のレクリエーションにはまだ参加したことがないが、私が行くころには子どもたちでいっぱいになっており大変にぎわっているため、多くの人から人気であることがよくわかる。ごはんを食べにくる子どもたちは小学生であれば友達と来ていることが多く、まだ小さい幼稚園児などは母親に連れられてくるものがほとんどである。小学生の子どもたち同士であれば、まだこの年だと学校以外で一緒にご飯を食べたりすることがないであろうから、月に1度やってくる夜に友達とごはんを食べられる機会として楽しみにしている子どもたちが多くであろう。また母親であれば、月に1度晩御飯のメニューを考えないで、低額な値段でご飯を食べることができ、更に多くの母親が集まるため育児相談、世間などのお話ができるのも育児で忙しい母親たちにとってはうれしいことである。またわいわい子ども食堂ではごはんを食べるだけでなく、季節に合わせたイベントも開催されている。例えばクリスマスが近い12月であればバルーンショーとマジックショーが行われ、食事にはクリスマスケーキがついてくることもあった。このように同世代の人とコミュニケーションが取れるのはもちろん、他世代の人とも交流ができるのも子ども食堂の人気の秘訣であると思う。子ども食堂を開設しているのは大抵子どもたちにとっては母親くらいの年齢の人から、祖母くらいの年代の人がやっているため、そういったスタッフの人ともコミュニケーションが取れるのはなかなかない経験なのではないかと思う。他世代の人とコミュニケーションが取れるのは参加してくれる子どもたちだけでなく、私たちボランティアスタッフも当てはまる。私自身も子ども食堂に参加したときは、一緒に片づけをしている時に上の世代の人とお話ができるのはあまり機会がないことなので楽しみにしている。お話をするだけでなく、子ども食堂は食事をするところであるため料理に関する豆知識など為になることも教えてくれたりして毎回非常に満足している。こんなに楽しくお話と遊びとごはんが食べられる場所は子ども食堂しかないのではないかと思っている。

3. 子ども食堂が作る居場所

ここから考えられる新しい子ども食堂の潜在的な可能性は居場所がないと感じている人に居場所を提供してあげられることだと思う。一般的な考え方から言うと居場所がない人というのはお金がなく貧困で苦しんでいる人のことを示す。先ほど上では、愛知県は他県に比べるとあまり貧困には悩んでいない、という調査結果を見た。そして今の子ども食堂の開催の目的は当初の目的である貧困で困っている子どもたちを救ってあげたいという思いはもちろんあるが、蓋を開けてみると結果的には地域のコミュニティの場所と認識されているところがほとんどであった。これだけ認知度も上がり、多くのところから支援をしてもらえるようになった今、新しい子どもたちの潜在的な可能性として誰でも来ることができる居場所として子ども食堂を確立させるべきだと考えた。居場所のない子どもたちの解決策を探しているうちにあるものを見つけた。それは「第三の居場所」という施設である。ある施設の1日のスケジュールは2時30分～宿題の時間、3時30分～おやつtime、4時～遊びの時間（宿題の終わった人から遊ぶことができる）、5時～わくわくたいむ、6時～お手伝い、6時30分～夜ごはん、7時～お片付け、7時30分～歯磨き&おそうじ、8時～自由時間となっている。このスケジュールを見ると子ども食堂と通ずるところもあれば、異なるところもある。通ずるのは夜ご飯の前のレクリエーション、夜ご飯を食べるといったところである。異なるのは、おやつの時間や、食事の準備、片付け、歯磨き&おそうじなどのまるで家で母親の手伝いをしているかのような内容である。この「第三の居場所」も開設目的は仕事で親の帰りが遅く、1人で夜ご飯を食べなければならぬそんな子どもたちを救うためであった。また、ここにいるスタッフは元保育士などが多く、子どもの扱いになれている人が多い。私がこの「第三の居場所」の施設を見て、子ども食堂に居場所がないと感じている人がもっと多く来てくれるためにやるべきことは、“スタッフという時間を増やす”ことである。子ども食堂に歯磨きなどの日常生活の一部を任せるのは現段階では、難しいことだと思う。しかし、ご飯くらいであれば一緒に食べられるのではないかと思った。今の子ども食堂のほとんどは私たちを含めるスタッフがお飯を準備し、それを子どもたちが好きに食べる。私たちの役割はご飯の準備、受付、子どもの見回り、とほとんどやっていることは飲食店と同じであるように見える。スタッフの人数に余裕がある場所であれば、スタッフの役割の1つと一緒にご飯を食べる人を入れてもいいのではないかと思う。普段機会がなければ関わることのない世代の人と会話することで新しい発見などもできるのではないだろうか。学校に友達がいる、一緒に子ども食堂に行く約束をしている子にとっては一緒にご飯を食べる相手もいるし、スタッフと一緒に食べる必要はあまりないかもしれない。しかし、学校で友達とうまくいかず、子ども食堂に行ってみたくも思っているのに一緒に子ども食堂に行ってくれる友達がいなくてはどうだろうか。最初は知らない人とのご飯は緊張するかもしれないが、重要なのは『必ず1人になることはなく、一緒に食べてくれる人が必ずいる』ということを知ってもらうことだと思っている。居場所がなく苦しい思いをしている人にとっては誰か一緒にいてくれる人がいるこのことがわかるだけでかなり子ども食堂に行きやすくなると思う。しかし、居場所がある、一緒にご飯を食べしてくれる人がいる、このことをどう伝えるのが課題となってくる。1度来てしまえばどんなところであるかわかるため2回目からは安心して行くことができるのだが、やはり1人でいると、最初に踏み出す勇気がかなり重いものになる。このことがうまく解決すれば、もっと多くの人に子ども食堂

の魅力や温かさ、人とコミュニケーションを取ることの楽しさが伝わると思う。だから、私も今後子ども食堂に関わっていくときには、どうしたらこの魅力をもっと発信することができるのかを考えながら関わっていきたいと思う。居場所というのは当たり前にある場所ではないし、人生の中で突然失うときもあると思う。そういった何が起きるかわからない世の中で少しでも安心して心が安らぐことのできる、そんな場所を子ども食堂に求めたいと思う。

【参考文献】

<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/292042.pdf>